



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.152  
2016.5.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

### ● 第9回 ● モースの層位論と遺物包含地

日本の貝塚研究はモースの進化論により科学の扉が開けられたが、モースの薫陶を受けた門下生の活躍は陸平貝塚報告を以て途絶える。縄紋式文化の研究は白井光太郎の訳語「縄紋土器」(坪井正五郎の「席紋」、「貝塚土器」、三宅米吉は「縄紋」)を嚆矢とするように、少し遅れて学生時代を謳歌した白井光太郎や坪井正五郎以降に人類学教室として再び活況を呈し、先住民の人種論に加え、遺蹟(含地理学・地質学等)・遺物(含岩石学等)の研究も飛躍的に進展した。特に西ヶ原貝塚の土器片から椎塚貝塚の完全形土器へ、と標本性の精度が格段に向上するなど、後述も含め**比較形態学は加曾利B式貝塚の研究が牽引した。**

一方で山内清男が晩年氣に掛けた阿玉台貝塚における「土器区分」論の復活と「伏流」問題を踏まえるならば、モースを嚆矢とする層位論にも年代の新古という重要なテーマ性がある。八木奨三郎による後年の南加瀬貝塚発掘から大正時代へと続く層位学の導出以前の動向は、モースの経験的思い込みが強く影響しつつも、地理学や地質学専攻学生を含む人類学教室の発掘調査・研究が層位論の抜本的な見直しに直結した。

岩波文庫の『大森貝塚』が「貝塚の長さは、(中略)厚さは最大四メートル」と訳出したことで多くの研究者が大森貝塚の貝層を誤解した。モースの「日本太古の民族の足跡」(岩波文庫に収録)では、「貝層の厚さは、数インチから二フィート半までさまざま、その上の土層の厚さ

も、二フィートから五フィート近くまで、とまちまちである。」と正確に記述する。寧ろ問題は貝塚の非科学的層位論で、「**貝塚の上に堆積する土層の厚さは、貝塚の年代を計る指標としては、信頼に値しないものである。**」(ゴチック体は引用者、以下同様)と裁断し、経験事例が紹介される。

大森貝塚の年代推定は海岸線の変化、食人説、貝類進化論、勾玉などを中心に多様な接近が図られ古さを遡及するが、層位論は検討から除外される。陸平貝塚では立地論と人骨の形質論が年代の論点として継承される。年代の新古に層位論を適用すべき芽を逸早く摘んだモースの学史的評価は殆ど知らないが、上下土層全般は後に**遺物包含地**として決着する。

チャップリンと石川千代松が発見し、坪井正五郎が発掘した西ヶ原貝塚も、「面積八東西三間南北十間計リ」、「最厚イ所即チ最多量ノ貝殻ノ有ツタ所ハ」、「此ノ十坪ノ間デ貝殻ノ層ノ最厚イ所ハ四尺最薄イ所ハ二尺」との記述から判断する限り

はモースの層位論にとどまり、貝層の上のみならず貝層下も問題にしない。

「最厚キ所六尺五寸余ニシテ最薄キ処ハ二尺二過ギズ」との斜面貝塚を形成する椎塚貝塚では、貝層と貝層の間に土層が検出され図示される(第12図)が、「最

上部二土壤アリ」との記述はモースに準じた理解である。下部貝層形成→「**一時往来場所**」→上部貝層再開という時間の経過が示されつつも、斜面貝層の堆積深度から「敷」までの発掘は断念する。阿玉台貝塚では一部「敷」を見、その翌年には佐藤伝蔵(地質学)が福田貝塚の地形にも救われ、「敷」までの調査を行う。

モースの貝塚上堆積土層の抜本的な見直しは「一時往来場所」と同等である。その認識は大野延太郎・鳥居竜蔵が明治28年に命名した「**遺物包含層**」を契機とし土中に存在する形態として刷新されるが、坪井正五郎も即座に遺物包含地は地下に形成される点を強調する。

畢竟、明治30年の坪井正五郎「**コロボックル思考法**」完成版は、遺物包含地の地下の意義を「遺物ノ上新二土ノ生ジタルナリ。此土ノ厚サハ遺物ノ新古ヲ測ル一根据トナスヲ得。」と近代化し、ここにおいてモースの非科学的思い込みの悪影響は完全に払拭される。



▲第12図 椎塚貝塚の貝層断面図

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

## 目次

■加曾利B式土器 モースの層位論と遺物包含地(第9回) 鈴木正博 …1  
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第2回) 間壁忠彦・間壁穀子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第145回) 大森隆志 …2  
■考古学者の書棚 『美の考古学 古代人は何に魅せられてきたか』 入江俊行 …4

## 考古学の履歴書

## ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第2回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

## 1. 瀬戸内海の小島でシジミ(下)

前回記した児島半島東端の押型土器採集地点のうち、一番南にある波張崎から4キロメートルほど南の海上に、南北約3キロメートルの細長い島がある。島の北端に近い浜に石島(いしま)という小さな集落があり、岡山県玉野市胸上に属する。島の南の大部分は井島(いしま)と呼び、香川県香川郡直島町で、ここには人家が無く、人が住んでいるのは岡山県側だけである。

石島の集落へは、波張崎に近い玉野市胸上の漁港から一日一往復の郵便船があり、これに便乗して石島で民泊、井島の遺跡所在調査を行なった。そのころ、花崗岩を母岩とする井島には松の木が生えていたが、直島本島にあった銅の精錬所の煙害で禿山の部分が多く、地面がよく露出して表面採集には都合がよかった。

1950年過ぎの岩宿発見後には、関東・中部地方から旧石器の情報が伝えられ、瀬戸内沿岸でもその存在に目をむけ、槍先形やナイフ形の石器を意識した。児島東端の押型土器片採集地点でも、僅かであるがナイフ形石器の存在に気がついていた。そうした中で、井島南端の鞍掛台地では小形のナイフ形石器と細石核を採集する。台地上は馬の背状になっていて土層の保存状況はよくないが、採集された石器はまとまりを示す数にのぼり、瀬戸内備讃瀬戸の旧石器(無土器・先土器)時代遺跡として鷺羽山遺跡とともに早くから知られた遺跡となった。

縄文早期押型土器は、島の西海岸中ほどの大浦台地で採集できた。東の尾根筋から西へ向かって延びた長さ40、幅20メートル、海拔高20メートルばかりの舌状台地となっている。西には、直島本島の東で南北に点在する島々を2キロメートルばかりの距離に望む場所である。

地表下20センチメートルほどの深さで有機土層が薄く残る部分があり、有機土層中に狭い範囲ながら貝を含むところがあった。貝の種類はほとんどがヤマトシジミで少しカキをまじえる。それは、児島東部の波張崎の小貝塚と同様で、獣骨らしいものは見当たらなかった。これで、播磨灘の汽水域が児島半島東部よりも南の直島群島東端までは広がっていたことが判明した。

瀬戸内海の海中の島で発見されるシジミの貝塚の話は、さらに続く。次回からの「製塩土器に注目」でふれることだが、1953～4年に葎子は卒論のため製塩土器の資料集めに専念する。香川県と岡山県の間島々は、その種の遺跡が新発見できる宝庫のような地域であった。小豆島の西の豊島(香川県小豆郡豊島村、現土庄町)へも足を伸ばした。

豊島は、井島の東2キロメートルにある東西6・南北4キロメートルばかりの菱形の島で、標高300メートルを超す高原状になったところもあって、変化に富む地形を持つ。遺跡のありそうな場所を島の人たちに聞きくと、貝殻があるところがあるという。島の南端で土地の人が「ダブカス」と呼ぶ地点。「ダブ」は小形の巻貝、小学生のころ夏休みに海水浴でこの島に泊まったとき食べた経験のある貝の名前だった。「カス」は「滓」であるから、小形の巻貝の殻があるものと思い、道も無い海面に囲

まれた断崖上の岬の先端にたどりついて見ると、貝殻はあるが小巻貝などではなく、狭い範囲ながらシジミ貝が地表に露出している。

これもシジミの貝塚である。押型土器の小片もあって、縄文早期の新貝塚発見、「ダブカス」の正体判明の瞬間であった。この場所は、国土地理院の地図には礼田崎とあって、ダブカス貝塚とも礼田崎貝塚ともよぶようになる。ヤマトシジミに混ざって、僅かにカキがある貝層は波張崎や大浦台地と同様である。シジミを小巻貝にみたててダブカスとよんだ豊島の人達には、海中の島の岬上にシジミ貝の殻があるなど想像すらできず、島の岩場にいる小巻貝のダブの殻と思い込んでいたのであろう。

ダブのことをその後思い出したのは、ダブカス貝塚発見から60年も経た近年のこと、倉敷市児島地区のスーパーで売っていた小巻貝を入手、湯がして食べると大変美味しく、貝の名を聞くとダメだという。倉敷市児島付近で採れたものである。ダメを食べる習慣は児島沖の島での民俗調査の報告にもみえる。貝の殻をよく見ると、考古学を始めてからは児島湾沿岸の縄文貝塚の貝として、お馴染みのスガイである。ダメとダブの言葉が似ているので、豊島からは播磨灘を北に渡った岡山県の黄島貝塚がある牛窓の漁村で聞くと、豊島と同じダブとよぶのがスガイのことだとわかる。

平城宮出土の備前国からの貢納木簡に「海細螺」(シタダミ)がある。「海細螺」はスガイであったらしく、古代に備讃瀬戸の特産品だった。古代のダミと現代のダメ、ダブは同じ系譜の呼び名の変化形だったようである。

豊島の海に突き出ている岬の上でダブと呼ばれていた貝殻が、実は瀬戸内の海での縄文早期のシジミの貝塚だったこと、またダブはスガイで奈良時代には平城宮まで運ばれていた。これが「それでは何だ」の答えだった。

豊島のダブカス貝塚から少し脱線したが、全体としては押型土器の時代の瀬戸内海の汽水状態の範囲を明らかにできたところのことを記した。

<b>間壁忠彦 略歴</b>	
1932年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問
<b>間壁葎子 略歴</b>	
1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国女子短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

## Jレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 145

## 小野遺跡 ～ 千葉県松戸市

大森 隆志

小野遺跡は千葉県松戸市にある奈良・平安時代を中心とする集落跡である。私が1992年(当時の所属は松戸市教育委員会社会教育課)に調査を担当した第1地点(約1400㎡)からは、平安時代の住居跡8・掘立柱建物跡3、縄文時代の住居跡1、が発見された。

松戸市では市内全域の踏査をもとにして、1976年に『松戸の遺跡』(所謂、遺跡分布図)を刊行した。この報告書の遺跡リストは充実しており現在も利用されている。これによれば、小野遺跡が所在する一帯には遺跡がないことになっていた。また、宅地化が進み、戸建て住宅や集合住宅が数多く建てられており、それらの建設工事に際しても発掘調査は行なわれてこず、遺跡がない場所と考えられていたようであった。

しかし、第1地点で集合住宅の建て替え工事が計画された時、念のため現地に行ってみると道路脇に土師器の小破片があるのを確認した。同行していた事務系の職員は「植木鉢の破片ではないか」と冗談交じりで言っていたが、決め手となったのは内面黒色土器の破片もあったことだった。後に、試掘調査、確認調査を行ない、1992年6月から本調査を行なった。

第1地点の調査以後、小野遺跡では29地点(2011年現在)で発掘調査が行なわれている。遺跡の面積は約82,000㎡、住居跡数は数百箇所と推定されている。この規模の集落が下総国府推定地の市営総合運動場内遺跡(市川市)から約4.5kmのところにあるので、国府との関係が注目される遺跡となった。特に、鍔帯金具が一帯分まとまって出土したことにより「国司が住んでいた集落」と新聞報道されたことで注目はされたが完全に誤報であった。記者発表で鍔帯金具(腰帯)と官位との関係を説明したが誤解されてしまった。

鍔帯金具が一帯分出土することは珍しく、当時では小野遺跡と豊橋市の市道遺跡くらいだったと記憶している。小野遺跡の鍔帯金具は松戸市立博物館で常設展示されており、2015年には市の文化財に指定された。

さて、古代を専門としない私(現在の勤務先の博物館では、旧石器と縄文が担当領域)でも発掘調査は大過なく行なえたが、報告書刊行に向けた遺物整理にはかなり苦労した。

約3ヶ月の発掘調査の後、遺物整理作業を開始した。小野遺跡の調査以前にも古代の遺跡の調査・発掘報告書の執筆の経験はあった。それらは小規模な調査で出土遺物が少なく、

私でも先輩や知人に土師器の年代などを教えてもらいなんとかあった。

しかし、小野遺跡からの出土遺物の数はテンバコで約100箱あったと記憶している。県の埋蔵文化財センター等で大規模な発掘を経験している方から見れば大した量ではないかもしれないが、これまでまともに古代の土師器・須恵器を整理したことがなかったので、私にとっては途方もない数に思えた。

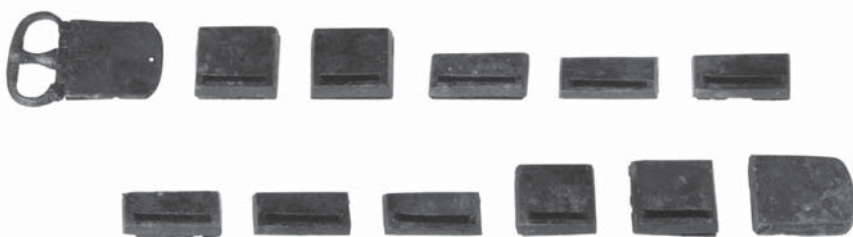
一番の難関は土師器・須恵器の年代だった。土師器の編年については、宮内克己氏の「東京湾沿岸における奈良・平安時代土器の様相」『房総における奈良・平安時代の土器』(1983史館同人)、「下総西部の土器編年について—下総国府・国分寺を中心にして—」『古代末期の葛飾郡』(1997菴書房)を何度も読んだが、小野遺跡の出土遺物と見比べると整合せず、ついには、宮内氏が発掘調査をしていた千葉県光町(現・横芝光町)の現場事務所に主な出土遺物を運び、教を乞うた。土器の時間的な形態変化を製作方法などから丁寧に教えていただいた。他にも、千葉県内で発掘調査をしていた土師器に詳しい知人にも聞いた。また、当時、筑波大学の技官だった吉澤悟氏には遺物の実測、参考文献の提供と大変お世話になった。

小野遺跡の調査が終わった後も集合住宅建設工事に先立つ発掘調査などを行なっていたので発掘調査後の夜や調査と調査の合間を見て遺物整理を細々と続けた。土師器の編年については「理解できたつもり」になったが、須恵器の理解については不十分な状況が続いた。しかし、調査が終了して7年目に入った1999年に報告書を刊行することにした。これ以上刊行を遅らせるよりも、調査の内容を正式に公表した方がよいと考えたからである。

現在、第1地点には遺跡の案内板が立っている。遺跡の所在を示す標柱や案内板は通常、市の教育委員会が設置するが、小野遺跡の場合は集合住宅を建設した業者が設置した。建設会社の営業担当者に遺跡の重要性を説明し、そのような遺跡が工事でなくなってしまったのだから、「案内板」のようなものを作ったらどうかと提案(教育委員会からの公的なものではない)したのがきっかけだった。実現不可能な提案だと思っていたが、後日、営業担当者から案内板を作る旨の連絡があり驚いた。さらに、費用が教育委員会で立てている標柱よりも一桁多いことにも驚いた。

以上、小野遺跡のことについて思いつくまま記した。調査が終了して既に24年経ってしまい記憶が曖昧なところ、勘違いしているところがあるかもしれない。その場合はお許しを。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは植木弘さんです。



▲鍔帯金具(3B号住居跡出土)

## 考古学者の書棚

## 「美の考古学 古代人は何に魅せられてきたか」

松木武彦著／新潮選書 (2016)

入江 俊行

「美術」とか「芸術」といったものは、人類の歴史を理解する上で確かに重要であろう。「美しい」とか「芸術的に優れている」という表現はよく耳にしそうな言葉だが、私にとっては単純であるが難解な言葉として、こういう表現に対してどこか苦手意識を持っていた。

何らかの対象について「美しい」ということは簡単だ。しかしそれが何故かと問われれば、それなりの説明は出来るかもしれないけれど、結局はそのように「感じた」としか説明が出来ない。また感じ方にも個人差があり、結局は好き嫌いの問題ではないかという思考停止にも陥りがちであった。

このように漠然と「美」というものに近寄り難い意識を持っていた私は、偶然書店で本書と出会い、少し立ち読みしてから即購入を決めたのである。

本書の章立ては次のようになっている。「第1章 人類は美とどうかかわってきたか」「第2章 形の美の変遷」「第3章 数と図形の美」「第4章 色と質感の考古学」「第5章 美の人類史と列島史」。人工物の美のあり方から歴史の筋道をたどるのが本書の目的となっている。

第1章では美の起源について考える上で「無用の用」という言葉が使われている。生物の中には生きていく上で必要な食糧を獲得するなどの行為のほかに、直接役には立ちそうもない行為（無用の用）がある。クジャクの飾り羽やライオンのたてがみ、シカやトナカイの角、セミやヒキガエルの声等があるが、これらは視覚や聴覚に訴えることで特定の反応を引き起こし「異性の確保や同性間の地位向上といった社会関係を有利に運ぶための手段」であるという。またこのような反応を「美」と位置付けるならば、ヒトが持つ美を感じる心はこのような「生物学的な淵源に由来する可能性が高い」とされる。

つまり美の原点、基盤というべきものはすでに生物の中に存在しており、ヒトもまたその影響下にあるということであろう。なお、ヒトの「無用の用」の例として、ホモ・ハイデルベルゲンシスの左右対称の石斧（握斧）（約60万年前）を挙げている。機能としては無用な左右対称という要素が、いわばクジャクの飾り羽やライオンのたてがみのように知覚への反応を促す役割を果たしていたという訳である。

このように読み進めてみると、美の起源は人類が誕生してある段階に芽生えたというより、ほとんど人類の歴史の始めからヒトと共に歩んでいたということになる。

私には2歳になる娘がいるが、彼女は顔が丸いパンのヒーローや、耳や顔の丸い有名なネズミのキャラクターに夢中である。ストーリー等もまだよく分かっていないはずの彼女が何故こうしたキャラクターに魅かれるのかといえば、声や色などの要素を除けば、やはり「丸い」という限りなくシンプルな対称形が、彼女の心になんらかの反応を与えているとしか考えられないのである。その「丸さ」を是とする心の動きは、後天的な経験によって得られたものではなく「生物学的な淵源」に原点があるのかもしれない。

第2章は形の美の変遷を土器の変遷から読み解く内容となっている。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器を概観し、

土器にみられる表現が機能的役割から逸脱していない「素朴段階」（縄文草創期～前期）、土器が機能的役割以上の社会的メディアとしての役割を託された「複雑段階」（縄文中期）、過剰な装飾を廃し機能美を追求する「端正段階」（縄文後期～古墳時代）と位置付け、その変遷をたどっている。

このような土器からみた形の美の変遷は、土器だけの变化ではなく、その背景にある社会や暮らしの変化と密接な関係があるとして第5章でさらに具体的に論じられている。

そういえば、身近な例として携帯電話を見てみると、通話機能のみで固定電話の子機を持ち歩いていたような素朴な段階から、電話として過剰なまでに多機能化（カメラ・ワンセグ・おサイフケータイ）し、折り畳む・スライドするといった形態状の変化と共に、携帯電話を「デコレーション」（無用の用）するといった文化も生まれるなど、まさに複雑段階へ進んだように見える。そして現在はスマートフォンが主流になりつつあるが、多機能化が進む一方、外見上のデザインはむしろ以前の携帯電話よりもシンプルであり、複雑段階から端正段階へと移行したかに見える。こうした段階の変遷過程は土器だけでなく、他の人工物にも見出せそうである。

第3章は人工物（遺構・遺物）に託された数や図形がどのような背景を持ち、どう心に働きかけたかを説いている。偶数は割り切れるし、ヒトの身体の様々な部分が偶数で構成されることからなじみやすく、前後、左右など対になるものもまた偶数であることから対称（シンメトリー）で安定している数であるが、奇数は割り切れないし、非対称、不安定な数であるとする。いわゆる縄文の美は複雑・不規則・非対称な中期の土器の造形と、三や五という単位の奇数がよびおこす感覚に根ざすとしている。

第4章は色彩や質感・量の美の背景にある社会状況を読み解いている。弥生時代、金属器の出現が、銅剣や石剣のような同じ形のを別の材質で作る「同種異質」の物作りのはじまりであったとし、この背景には人を階層で分けたり、場を日常と非日常で分けたりするような場合に、物が積極的に利用されるような状況が生まれていたと位置付けている。

また、古墳時代に至り、有力者の権力が隔絶したものになると、古墳の埴輪や多量の副葬品にみられるように、圧倒的な量を示す「量の美」に転換していったとする。

第5章は総括であり、紙幅の都合もあって割愛させて頂くが、美の観点から考古学的に列島の歴史を見直した場合、現在の時代区分も見直せるのではないかとというのが、本章の趣旨と思われる。

本書では、美のあり方が社会の仕組みや再生産に寄与していた可能性を追求しており、画期的な論考でありながら一般向けとしても大変読みやすい書物で、ぜひ一読をお勧めしたい。

## アルカ通信 No.152

発行日	2016年5月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ
	〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
	TEL 0267-25-0299
	aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp